

## ベニ・モレと CANDIDO・ナバーロ (増補版)

私の友人の CANDIDO・ナバーロ(1929-2012)は、ベニ・モレ (1919-63) の友人でもありました。その彼が、ベニについて思い出を書き遺したものを紹介します。

### ベニ・モレの思い出

1954年のことだが、私、ナバーロは、国内で衣服の製造販売を行っていた。そのため地理的に便利な国の中央部にあるサンタ・クララに住んでいた。ある日、ベニ・モレが家に訪ねてきた。この町で彼のオーケストラがコンサートを行うために滞在していたからである。



←サンタ・クララ市

私の義理の兄 (妻の兄) のロレンソ・ガルシアは、すでにベニを知っていた。ロレンソは、カリブ銀行の監査役としてベニがハバナで家を建てるにあたり、資産評価を行ったことがあったからであった。そこで、兄は、ベニにサンタ・クララに行くなら、私の家を訪ねるように言っていたのである。

ベニが私の家を訪問した時、すぐに私と友達になった。彼は、率直で、陽気で、話し好きであったからである。私は、彼に、サンタ・クララにいる間、私の家に泊まるようにすすめる、私の家族とも友達となった。特に、彼を親切に世話した妻の母とは親しくなった。この時、私は25歳、ベニは35歳であった。

革命勝利後の1960年、私は、ベニと共同で、ハバナ市西部のヨット・ハーバーがあるバルロベントにローンでキャバレーを開設する計画を立てた。しかし、革命が進み、それは実現しなかった。彼は、大変気前がよく、人懐っこく、また良い父親でもあった。仕事では、放浪の生活であったが、家族を大切にしていた。

バルロベント→



私は、しばしばハバナの彼の家を訪問した。大変面白かったのは、彼が作曲する様であった。彼は、楽譜を読めなかったので、耳で聞き、一本の指でピアノを弾き歌のメロディーを作った。その後、他のミュージシャン達に、それぞれの楽器を弾く箇所を歌って聞かせ、オーケストラの編曲を行った。こうして作曲を行い、暗記し、持ち歌を演奏し、独特の方法でオーケストラを指揮したのであった。

彼は、金銭には少しも固執せず、レコード会社にしぼりとられていた。普通のキューバ人市民と同じように、家族とともに質素な生活を送った。しかし、欠点はアルコールで、そのため、家族生活と健康を損なって行った。しかし、人生の最期まで、音楽活動を止めることはなかった。

最後には、何度も入退院を繰り返したのち、1963年2月19日に亡くなった。私が彼の死を知ったのは、テレビのニュースを通じてであった。ベニの死は、キューバ市民みんなが悲しんだ。それは、当時私が知っているどんな著名人よりも悲しみを与えたのであった。



2011年9月28日 カンディド・ナバーロ

#### **親友、カンディド・ナバーロのこと**

では、このカンディド・ナバーロとはどういう人でしょうか。残念ながら、先週の13日（金曜日）ナバーロが亡くなったという連絡を彼の家族から1月16日に受け取りました。享年82歳でした。この機会に、キューバを愛して、献身的に仕事に励み、革命を生きてきた、平均的な中間層の一人のキューバ人の一生を紹介したいと思います。キューバ革命の一面を知る意味で、参考になるのではないかと思います。

彼の正式な氏名は、カンディド・ナバーロ・トレイロといますが、家族でも、友人の間でも、ファースト・ネームの「カンディド」ではなく、「ナバーロ」と呼ばれていました。穏やかな物腰、端正なスタイルから、彼が、日本に商談に来た際には、日本人の間では「紳士」と呼ばれました。ところが、その後、キューバでも「伯爵」と呼ばれていることを知りました。



1974年、新幹線内で

ナバーロは、1929年2月5日、ハバナ市のマリアナオ区でスペイン人の両親の間に生まれました。兄弟は、4つ上の姉のオルガと5つ下のマヌエルがいました。1931年、2歳の時、ナバーロは、両親と一緒にスペインのガリシアに帰国します。しかし、スペインでの生活も苦しく、両親は1937年にキューバに戻り、ハバナで生活を始めます。ナバーロ少年は、同年、8歳の時カトリック系の小学校に入りますが、3年生の時、引っ越しで別のスペイン系の私立学校に転校し、そこで5年生まで勉強しました。

1942年、ナバーロが13歳の時、軍服の仕立屋で働き始めました。給料は、月10ペソでした。しかし、少年は、家計が苦しかったことから、小学生の頃から、映画の広告を配ったり、くず銅を集めて売ったり、野球場で駄菓子を売ったりしていました。1943年、彼は、

男性用の衣服を売る店に転職し、給料は40ペソになります。その後、父親が働く、衣類の卸問屋で働くようになり、公立の夜学校で8学年を修了しました。その後、1951年まで、働きながら、夜間のハバナ・ビジネス学校で、英語とタイプを習うとともに、高校に通いました。

1952年（3月、バチスタがクーデターで政権に）、23歳のとき卸問屋のセールスマンとして



キューバの地方を回るようになります。この年、ナバーロは、エロイサー・ガルシアと結婚をし、国内のセールスに便利な、キューバの中央部にあるサンタ・クララに住むようになりました。1954年、25歳の時、父親とともに「スポーティング」というブランドの衣料の卸売会社を設立しました。また、この年に長男ヘラルドが生まれ、1957年には長女、マリア・デル・レナール（マリレニ）が生まれます。

左からマリレニ、ヘラルド、ニ）が生まれます。会社は、最初の3年間は赤字でしたが、1958年から事業も上向き始め、月収も1000ペソ近くになりました。そこで、ハバナに戻り、資材の買い付けに専念することになりました。現在のフォンタナールの住宅街に1軒家をかまえました。この頃、音楽好きなナバーロは、ポピュラー音楽のトリオ・タイクーバのリーダー、バス・タブラーネからギターを習います。



1978年レストラン、エル・フロリディータでタブラーネと

会社が順調になったナバーロは、この頃ラジオで、7・26運動の反バチスタ独裁闘争が行われていることを聞いていましたが、このたたかいは勝利するとは思っていませんでした。ただ、キューバの悲惨な社会状態、悪幣、汚職、虐待、拷問、大きな格差が変わることを望んでいました。

しかし、1959年7・26運動が勝利を収め、1月8日にフィデルがコロンビア兵営で行った歴



史的な演説をナバーロは聞き、これまでとは違ったことが始まっていると感じました。その後、家賃の値下げと都市改革(1960年10月)、米国企業（1960年9月）・銀行の国有化（1960年10月）、キューバ人所有の大企業の国有化(1960年10月)、私立学校の国有化（1961年6月）など革命が深化していくのを共感をもって見ていました。

そこで、1959年10月全国革命民兵組織(MNR)が創設されたとき、民兵組織に志願しましたが、企業経営者で組織労働者でないという理由で断られました。数か月して、再度志願しましたが、同じ理由で断られました。そして、1962年10月、ミサイル危機が勃発した

時、キューバ人として祖国を守りたいと願って、民兵組織の本部に行き、志願しました。すると個人データを書きとめ、後で連絡するということでしたが、今度もまた連絡が来ませんでした。正式に民兵組織に志願が認められたのは、1963年に国営のキューバ繊維公団の勤務員となってからのことでした。

革命が進展する中で、卸売会社経営者のナバーロは、自分の会社の存在の理由もなくなっただけになり、すでに雇い人も1名になり、父親と彼を入れて3人の会社になっていました。1962年12月4日、国内の中小商業が国有化されたとき、ナバーロの会社がその対象リストに入っていないことがわかりました。そこで、ナバーロは、国内商業省に申し出て、国有化してもらおうように申請しました。その結果、12月11日によろやく10,000ペソ、10年割賦で償還と言う条件で会社は国有化されました。自ら資産の国有化を申し出るの、まれなケースでした。

ナバーロは、翌1963年（第二次農業改革実施）、34歳の時から貿易省傘下のキューバ繊維公団(Cubatex)に勤め始めます。収入は、大幅にダウンし、給料は労働省で決められている賃金表に従い、月170ペソでした。しかし、ナバーロは、水を得た魚のように、献身的に仕事に専念します。すぐさま輸入部長となり、スペイン、イタリア、フランス、カナダ、東ドイツ、チェコスロバキアに商談で出張します。しかし、1967年11月、突然、繊維公団の副総裁から、理由も説明されず、解雇を言い渡されました。その後、フェルナンデス貿易相がキューバ労働センター(CTC)本部で、貿易省傘下の諸公団で過剰人員の合理化が必要であり、整理された人々を専門にふさわしい職に再配置すると説明しましたが、実行されませんでした。ナバーロは、農業の仕事を紹介されましたが、引き受けませんでした。ナバーロは、自ら振り返って、献身的に働いてきただけに、この突然の解雇は、その後トラウマとなって残り、気落ちした状態が1年半続いたと述べています。確かに、革命後一気に膨らんだ過剰雇用を合理化することは、必要でしたが、問題は配転する人員の選定でした。ナバーロの場合は、彼の能力に嫉妬をいただいた同僚が中傷したようです。

その後1968年9月、39歳の時、漁業庁(INP)傘下の「メキシコ湾漁業公団」で働くようになり、翌年、漁業庁の資材供給部に勤務するようになりました。1972年にはキューバ漁業資材輸入公団(Cubapesca)漁具資材部長となりました。漁業省で、脂が乗り切った形で仕事に励んでいたおり、1972年3月最愛の妻エロイーサが交通事故で死亡しました。この悲しみが数年間続いたとナバーロは述懐しています。筆者が、漁業省でナバーロに最初に会ったのは、この痛ましい交通事故後数カ月しかたっていない7月のことでした。漁具についての話し合いでしたが、ほとんどしゃべらず、じっとうつむいていた姿を思い出します。



1974年広島にて

1977年には、漁業省(MIP)がパナマに設立した合弁企業のセルビナベ社に派遣され2年間勤務し、1979年からはキューバ・トロール公団 (FCP、従業員6,000人) のスペインのビゴ事務所に代表として派遣されました。1980-1981には、FCPの本部の購買部長を担当し、1981年にはパナマに合弁企業アインサ社の総責任者として2年間派遣されました。1988年漁業省を定年で退職し、筆者が経営していた大信インターナショナルのハバナ事務所長として勤務するようになります。漁業省に勤務していた20年間、ナバーロは、ソ連、東ドイツ、ペルー、イギリス、スペイン、イタリア、フランス、ノルウェー、ポルトガル、日本、カナダ、パナマ、ニカラグア、モザンビークを訪問し、商談を行っています。深く豊富な商品知識、洗練された商談の進め方、清廉潔白な買付態度、まさに一流の国際ビジネススマンでした。

1989年からナバーロは、大信インターナショナルのハバナ事務所長として、誠心誠意働きます。しかし、90年代に入り、「非常時」に入り、キューバの支払い能力が困難となり、これまでとは違った国々から輸入するようになりました。それまでは、貿易のわずか15%を西側諸国から輸入していましたが、ソ連圏の崩壊により、輸入相手国、企業が大きく変化したのです。イタリア、メキシコの企業や、新たに参入した日本の企業が、袖の下を使い始めました。これまでと同じ品物を同じ価格で見積もっても決まらない例が続出しました。私たちは、賄賂を渡さなかったからです。そこで、1997年のある日、私は、ナバーロに



1987年自宅にて

「賄賂を渡してでも貿易をしようとは思わない。これまでキューバとは、一度も賄賂を渡したことがない。もはや時代が変わったのだね。倒産をする前に、余裕があるうちに会社を整理しようと思うがどうかね」と聞きました。ナバーロは、「俺も、そう思う。引き際だね」ということであった。そこで、1997年5月、ハバナ事務所を整理し、引き続き東京本社も整理したのでした。

ナバーロは、問題の本質を的確に把握することに優れた人でした。その例を二つ紹介します。

ナバーロは、1974年と1975年の二度にわたり商談で日本を訪問しました。その際、日本の瀬戸内海で沿岸漁業の定置網の一種の建網（つぼ網）漁を見て、小舟で漁ができ、燃料がほぼ要らないこと、漁具が簡単で耐久性があること、保存経費が安くつくこと、地域の住民に新鮮な魚が供給できること、などの経済性、社会性を認識し、キューバでつぼ網を普及したいと考えました。



つぼ網の模型

当時、キューバは、ソ連から習った遠洋トロール（底引き）漁業と、日本から習ったマグ

ロはえ縄漁業（大西洋で操業）が盛んで、年間漁獲量は20万トン近くでした。しかし、遠洋漁業は燃料代など経費がかかり、住民の多様な魚種の要求には応えていませんでした。トロールでは、イカとアジがほとんどで、マグロは輸出に回されました。

そこで、ナバーロは、訪問時の買付計画にはありませんでしたが、買付交渉の値引きで得た予算を使い、トライアルで一式買付け、キューバで試してみたいと考えました。そしてまとまった金額の本体契約に、サービスとして技術者と漁師2名のキューバへの1カ月の無償派遣と技術指導を入れました。ところが、数か月後に



技術者たちがキューバに到着してみると、ナバーロの指示にもかかわらず、送られた組み立て済みの網は解体され、一部の漁具は他の用途に使用され、設置ができませんでした。当時のキューバは、漁業は、95%以上が国営企業で行われ、大艦巨砲主義で、燃費を考えた沿岸個人漁業など考える人は、ほとんどいなかったのです。

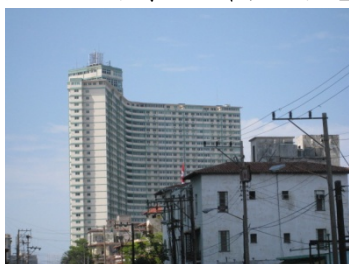
#### 設置されたつぼ網（瀬戸内海）

また、キューバは、この遠洋漁業のため年間300トン以上の漁網、500トン以上のロープを毎年買い付けていました。日本の年間漁獲量が800万トン程度、年間の漁網輸出量が1,000トン余りのときです。そこで、ナバーロは、日本で工場見学をする中で、キューバでの漁網とロープの生産を考え、第一段階として、ポリプロピレン(PP)ロープの製造プラントを輸入する計画を立てました。PPの原糸から製造すると膨大な設備になるので、燃糸、熱処理機械を購入すれば、必要な過程は余剰がめだつ労働力を利用して手作業でと案を練りました。また、ロープは、国内の農作業でも大量に使用されますので、必要に応じて2シフト、3シフトを考えればよい、また、近隣のカリブ海諸国にも輸出できると考え、1交代年産500トンの3億円程度（投資回収5年）の現実的な企画書を上部に提出しました。そうすると、いろいろな「専門家」たちが介入し、15億円程度の巨大プロジェクトとなり、経費があまりに多額ということで、結局実現しませんでした。これが実現していれば、ロープの輸出もでき、小規模ながら、アジアと同じような「輸出志向型」の製造業が誕生していたのです。

こうしたナバーロの考えは、25年経った現在の経済改革の中で求められていることです。ナバーロの考えが時代の先を行きすぎていたというよりも、それを実現するシステムでなかったから、経済改革が必要となっているのだと思われます。

ハバナの大信事務所では、週末には、ナバーロの姉のオルガの最初の夫、オスカル・ピノ・サントス（当時キューバ・エコノミスト協会会長）、ミゲル・フィゲラス元経済企画庁第一次官などの優れたエコノミスト達とナバーロを交えて、キューバ経済について話したものでした。ナバーロは、キューバ共産党には入党することはありませんでしたが、「自分は社会主義者だ」と筆者に話していました。そして、ナバーロは、キューバの現状

については、「フィデルは理想的すぎる。国民はそこまで理解できていない。労働意欲をかきたてる仕組みが必要だ。余りにも中央集権化しすぎており、経済を活性化するためには市場が必要だ」と常々述べていました。



大信・ハバナ事務所が6階にあったフォクサビル

ナバーロは、不幸にして、家庭の事情から大学には行けませんでした。音楽、文学には深い関心を持ち、ベートーベンのピアノ・ソナタ「月光」を愛し、ガルシア・ロルカの詩を好み、シェクスピアやロマン・ロランを愛読していました。ポピラー音楽では、アグスティン・ララの「ノーチェ・デ・ロンダ」を、ギターを弾きながら歌ったものでした。

また、娘のマリレニは、キューバ芸術大学でピアノを学び、クラシック音楽のピアノ伴奏者として、芸大でも教えています。その水準は、第9回ハバナ国際ギターコンクール・フェスティバルで共演した日本屈指のギタリスト、福田進一氏が、絶賛しているほどです（『現代ギター』1998年8月号）。キューバ・ピアニスト界の重鎮、フランク・フェルナンデス、ホルヘ・ルイス・プラッツもナバーロの友人でした。このたび、ナバーロの最期を見取った現在の妻ミリアン・クルスも、キューバ芸術高等学校のピアノ科の部長です。



1997年妻のミリアンと

マリレニの関係で、やはり、ハバナの大信事務所には、週末にしばしば、レオ・ブロウエル、ヘスス・オルテガの大御所から、レイ・ゲーラ、ワルフリード・ドミンゲス、エドゥアルド・マルティン、ファン・カルロス・ジョロなどの俊英が集まり、ギター論議や、個人演奏を行いました。

長男のヘラルドは、化学者として、海産物から作る調味料の研究を進め、現在メキシコのソノラ大学の教授として、研究と後進の指導に当たっています。



2000年にナバーロから、ハバナ市の新市街を眺望する絵葉書をもらいました。そこには、「建物のペンキがはげ落ちて、塗らなければならないが、私には、今もなお美しいハバナである」と書いてありました。ナバーロさん、安らかに眠りください。十分に働いた人生ですから。（文中敬称略）

（2012年1月19日 新藤通弘）